

上代文献所見の間投助詞「と・に・を」小論

鈴木 一 男

点も同様である。

筆者はかつて、「初期点本所見の呼格表示の助詞『と』について」(訓点語と訓点資料)第十二輯、後に論文集「初期点本論攷」所収)を発表した。

これは平安初期の訓点資料に見られるもので、對話文の呼掛語につけられた「と」で、願經四分律古点の一例をあげると次のようなものである。

「難陀^ニ汝^ニ覺^シ樂^シツヤ不^ヤ」の「と」である。この「と」は一般にヨコト点であらわされているが、聖語藏尊藏の金光明最勝王經註釈卷八古点には仮名「止」で示されている。

「世尊^ニ以^テ是^ノ因縁^ヲ(を) 諸^ノ臍部洲^ニは安隱^ニ豊樂^ニならむ」大坪併治博士の調査された白鶴美術館蔵大般涅槃經集解卷十一古点にはヨコト点と仮名を用いた例が多い。景雲經の大方広佛華嚴經古

初期点本に所見のある呼格表示の「と」を漢文訓読のために工案されたものとみないで、万葉集の訓読に適用してみることになると巻一の長歌七九の「来座多公与」(最近の註釈書では「来」字を「尔」の誤りとしている)や巻十三、三三一二の「吾天皇寸与」などの「与」字を「ヨ」とよまず「ト」とし、それぞれ右の箇所を「イマセオホキミト」「アガスメロギト」と改訓できそうだという試案をその論文で述べておいた。

この「と」は呼格表示だけでなく、上代歌謡に多く見られる「知らにと」、「山を嶮しみと」の「と」と関係のあるもので、この「と」が間投助詞と認定すべきことも加えておいた。

二

万葉集巻五の山上憶良作の沈痾自哀文の長歌八九七の一節「老いてある 我が身の上に 病遠等 加へてあれば」の「病遠等」に

見られる。」と」も問題の例である。

この部分は諸説があったが最近の註釈書では「ヤマヒヨト」に固定して訓法には問題はなくなったが、解釈になると格助詞とみるものが多い。

諸注を集成されている澤瀉久孝博士の萬葉集注釈には総釈の「二物を並列する時のとだと思ふ。」

即ち老と病とを並べて挙げた為にとを入れたものかと思はれる。』とあるを引用してあり、口訳には「老いてしまつてゐるこの身の上に病を加へてゐるので」となっている。しかしこれだと「病をと」とある助詞「と」の加わっている意味がはっきりしない。

ところが岩波大系本の補註には次のような解説がなされている。

「単に病を加えているからというのではなく、病をとて、病をといつての意であらうか。」

『兒をと妻をと置きてとも来ぬ』(巻二十、四三八五)『汝をと吾を人を離くなる』(巻四、六六〇)などの例があるが、みな並列の意を示すもので、兒と妻、汝と吾というように二つがあげられている。この歌の場合のトの用法は疑問である。或いは衍入ではあるまい。』と述べておられる。

小学館の日本古典文学全集の頭註には、「病を加えてやれとて」とあり、解釈の方には、「年老いたわたしの身に病氣まで加わっているの」となっておるし、新潮日本古典集成の訳にも「老いさらばえた我が身の上に病氣まで背負わされている有様なので」とある。

「知らにと」「さかしみと」の「と」を林大氏が「冗言のように

も見られる」と論じられたと同様に万葉集の「病をと」の「と」を大野晋博士が「この歌の場合のトの用法は疑問である。或いは衍入ではあるまいか」となされた説から、間投助詞「と」の例とすることにならないだろうか。

次に訓読語の用例を加えておくと、古来よく知られた小川広巳氏本八十卷花嚴経音義私記に次の例がある。これは岡田希雄氏の考証「新訳華嚴経音義倭訓攷」に説明がある。

「汝何成爲^{ナニセムトゾ} 奈尔世牟止曾^{ナニセムトゾ} 经文に汝何成爲^{ナニセムトゾ}作^{ナニセムトゾ}是惡業」とある。

ナニセムトゾの仮名書は無いが、万葉集に銀も金も玉も奈尔世武尔とある。助辞のトは乙類で正しい、曾も正しい。』と出ている。ただ岡田氏は「と」の用法には言及されていない。

築島裕博士の「平安時代の漢文訓読語につきての研究」に体言について述べられた所に不定称「ナニ」の類をとりあつかわれ、その中に「何爲」「若爲」の訓について述べられ、

今日は「ナンスレゾ」と訓するのが一般であるが、古くは非常に多くの異訓があり、管見に入っただけでも、「ナニセムトゾ」「ナニセムゾ」「ナニスレゾ」「ナニスルモノトシテカ」「ナニスレカ」などの例がある」とし、前述の花嚴経音義私記の例をあげておられる。

「ナニセムゾ」の例として春日政治博士は斯道文庫本願經四分律卷四十九古点の「梵行ヲ行スルコトハ何^{ナニ}爲^ムソ」をあげられたが、筆者は願經四分律の聖語藏本卷三十八から次の例を追加することが出来た。

時王自^{ナニ} 念^{ナニ} 何^{ナニ} 須^{ナニ} (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)

右の文は「何為」二字の漢字の中に動作を表現する語句を挿入したものである。正倉院聖語藏御本中論古点にも次の例がある。

要す当に先つ有て染者 然して後に起すヘキヲイフツト染を

右のモチテトイフツの例はモチテトイフツと同例であろう。

「イフツ」は「イフソ」と近似した表現となり、この「と」も間投助詞であろう。

三

従来の古点本の語法調査報告には間投助詞は、「し」が、「かならずしも」「ただし」「いまし」「なほし」などのような複合副詞として用いたものだけが記されていて、ほとんど言及がない。

上述の「と」を間投助詞と認定したのであるが更に間投助詞「を」の用例を加えることにする。

もつとも戦前既に松尾拾氏が「客語表示の助詞「を」に就いて」(橋本博士還暦記念国語学論集) 格助詞の「を」は元来間投助詞であったと考えられ、目的格表示のためには必ずしも「を」を必要としなかったことを平安朝和文資料を用いて実証されたことがあり、これが今日定説となっている。ただ訓読では格表示を明確に示す必要に迫られて「ヲ」助詞を多用するに至ったものであろうといわれている。(築島博士の平安時代語新論五五二頁)

万葉集では格助詞ではなく明瞭に間投助詞と思われる例があり、一般の注釈書に間投助詞「を」として注記してある例も多い。しか

し中には学者によつて意見の分かれる用法もある。巻五の「海原の沖行く舟を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫」の「舟を」の例を格助詞とする説と間投助詞とする説とがあつてその区別は必ずしも明確ではない。沢瀉博士の注釈では雑誌「萬葉」十三号所収の植田嘉子氏の「万葉集における助詞『を』」の感動助詞とも呼ぶことが出来るという説を紹介されたが、この歌の「舟を」の「を」をやはり格助詞の一種と見る方が穩かだと思はれる」とされた。その後刊行の小学館の日本古典文学全集の小島・木下・佐竹氏共訳では「このヲは呼びかけのヨと同じような用法」と頭注に出ている。新潮日本古典集成の伊藤博士の頭注には、「沖行く船を」「を」は「振らしけむ」に続く格助詞。呼びかけの感動助詞と見る説もある」としている。万葉集では「を」が単独で使用してあり間投助詞と認められる例は巻十一、二六〇三の「恋ひつつをあらむ」。巻二、九〇の「山たづの迎へを行かむ」のごとく用例が多い。

格助詞「に」「と」につづき、「にを」「とを」となったものの「を」は間投助詞と認められている。これは

特に巻五に用例が多く、八〇七の

「現には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にを 繼ぎて見えこそ」

同じ巻五、九〇四の「さきくさの中にを寝む」とも同例であり、

巻九、一七二七「朝りする人を見ませ」の例もそれだといわれている。

虚字「況」の固定訓は「いはむや……」においてをや」で、これは

春日政治博士によると、平安中期頃から使用されたもので、古くは「いはむや」は「をや」と呼応せず、「はや」であった。(古点の況字をめぐって)

春日博士によると、「をや」は文尾に附く感動助詞で、宇津保以下の物語には時々出て来る語であつて、少くも平安中期以後の国語には確かに使用されてゐたものらしい。」として宇津保以外に落窪、源氏の諸例が示されている。

後撰集の「白河の瀧のいと見まほしけれど みだりに人をよせじものをや」が一本に「とや」となっていることをあげられたが、筆者はまだ後撰集の古写本を調査してないので何とも断言できないが、「と」に間投助詞的用法があつたとする、「をや」とすべきところを「とや」としたことの一つの意味を考えてみたい気がする。

もちろん同じ間投助詞であっても「と」と「を」との間に用法の差異を考えてみなければならぬし、使用範囲、新古の別など新たな研究課題が生じることになる。

四

間投助詞「を」については、初期点本で主語につけた例を大坪博士は度々指摘されていられるが、願経四分律卷四十六「因縁を有(り)て衆僧集会せり」もその例である。

助詞「に」と「を」は古来用法が異なるものであり「に」格をとる動詞と「を」格をとる動詞とはっきり区別があるものであり、た

またま一つの動詞で「に」格と「を」格をとるものがあるとその場合は意味がわかれているとするのが一般である。

ところが初期点本には「に格」と「を格」を両用するものがある。このことに関して春日博士は「離る」の例をあげ、この動詞は二、三両用で「意味も別に異なる所はなく共に自動のようである」といわれており、また「シリゾク」も同様だといつておられる。

若是の經典を聴聞すること得ル者は、皆〔於〕阿耨多羅三藐三菩提に退(か)ず〔不〕なりヌ。

皆速ク生死の大海を渡(らし)メ、菩提ヲ退(か)ず〔不〕〔あら〕令(め)む。(西大寺本研究一三八頁)

筆者の調査した成実論天長点や願経四分律古点、菩薩善戒經古点には、「に」「を」を併記した例が目立っている。

「子にを離れて」「一解脱にを離れて」(菩薩善戒經)

五

初期点本で一つの漢字に「に」と「を」のヲコト点を加えたものは、格助詞の「に」と間投助詞の「を」が加点されたものと認めることができようかと思うが、中にはそう見ることのできない例がある。以下特異な例文を列挙してみることにする。

① 願経四分律卷四十二の例

若作鼠ヲネ檻カギを盛(り)て出(し)て棄(て)ヨ〔之〕

(若)鼠ヲネの檻カギを作(り)檻カギに盛(り)て出(し)て棄(て)ヨ〔之〕と檻を上

の語に關係してよみ、又鑑を下の語にかけて訓じたものと見て、ともに格助詞とすると容易に理解が可能となる例である。

② 我レは海の中を過に(ニ) 大風ありて吹(キ)て船を五百の一買人没し在(セ)シメタリ海の中に、唯し我のみ安一隠に(シテ)而還レリといふ(一)（願經四分律卷三十八、古点）

右の「海の中にを」は「海の中にありて中を遇(くる)に」と訓む例とみたい。

③ 菩薩摩訶薩住(シ)たまふは於此の行(ニ)為の諸(ノ)衆生をして入(ル)（ら）しめ(む)か寂靜に故に。為の諸の衆生をして知(ラ)しめ(む)か法界を故に（菩薩善戒經卷八古点）

右の「知らしめむか法界を」は「法界に(ニ)ある」を知らしめむ」とよんだとみたい。

次の諸例は一つの漢字を二つの意味にとつて、それぞれに、かなをつけたものとみられる。

④ 菩薩復言く我已に具(ツ)し(ニ)信と戒と聞と施と慧と(ト)汝も亦當に具すべし（善戒經卷四）「具(ツ)しぬるを」とみる例であらう。

⑤ これと同様な例は「足を」名詞と動詞に読んだと思われる例である。

坐(スル)に趣(ツマ)に容て膝を亦足(ニ)に障フルに水雨を(一)（願經四分律卷三十七古点）

「足障水雨」は「足に水雨にを障フルに足レラム」とよんだものである。ただし「障水雨」のにをの訓みは不明。

⑥ 今時に比丘、患して創を(版本瘡)須(もちめる)へし二唾を(もち)て塗(ナ)りて以銚(ナヘ反)の底(ニ)を熨(ノス)ことを(一)（願經四分律卷四十二）

「以銚底熨」は「銚の底に塗(ナ)りて銚の底を(もちて)熨(ノス)すことを」と銚底を二度よむ例ではあるまいか。

⑦ 古点本では一つの漢字を二度読む例がある。又經(ノ)中に説(ク)、斷(セ)るを罪福の業(ヲ)一名阿羅漢と。是の人は不(レ)集(セ)罪業福業及不動業。故業(ヲ)は受け畢(リ)ぬ新業(ヲ)は不造(成)（成実論卷十一長点）

故を「故に」によみ再び故業として二度よんだ例である。これを要するに、これらの諸例は初期の漢文訓読にあたって種々苦心した訓法の結果であつて、すべて訓法の特異例とみとめるべきであらう。

本小論は 昭和三十七年十月二十八日 九州大学で開かれた春日政治先生追悼研究発表会（第九回訓点語学会）の時に「平安極初期点本所見の訓法二つ」として発表したものの一部である。

古経巻資料は一部を除き大部分が正倉院聖語藏尊藏の初期資料で、正倉院事務所の特別な御許可を得て拝観したものである。

〔追記〕

初期点本にみられる呼格表示には「止」「ト」または「と」とよまれるラコト点が使用されるのが普通であるが、地藏十輪經元慶点には「ト」が十九例みられる。この符号は琵琶譜に見られるものと同形で恐らく「停」字の旁の一部を転用し、小休止の意味をもたせるため案出されたものであるが、古点本に呼格の記号として利用されたものであらう。